

資 料

地方・過疎地の道東根室地区における看護を 見て聞いて体験して —ルーラル・ナーシング同好会活動報告—

Nursing students experience of Doto Nemuro as a rural area
Activity report of RNC

泉澤真紀¹⁾ 山崎陽弘²⁾

Maki IZUMISAWA, Akihiro YAMAZAKI

¹⁾ 旭川大学 保健福祉学部保健看護学科

²⁾ 町立別海病院 旭川大学地域研究所特別研究員

キーワード：地方, 過疎地, 看護, 体験

はじめに

2018年8月13～15日、ルーラル・ナーシング同好会（Rural Nursing Club；以下RNC）は、地方・過疎地域（以下、地方）の看護を体験するために、道東根室地区にはいった。RNCは、教員の呼びかけにより根室地区別海町出身の学生が集めた6名有志（4年生1名、2年生5名）でつくった、地方の医療と看護を体験する同好会である。体験を通じて過疎医療の課題を考える動機になればとの願いがあった。

本活動に先立ち、旭川大学地域研究所の助成をうけ根室圏内で働く現役看護師にインタビュー調査を実施していた。その研究結果の中で、「学生時代に経験した実習などの出来事は、将来の看護師像を形作っている」ということが明らかになった。共同研究者と協議を重ねる中、地方では看護師不足に悩まされていること、もっと地方の医療の実態を理解してほしいことが議論された。そこで、学生にこれからの医療の将来を考えられる一つとして、地方の医療の実態を、体験を通じて理解してもらう機会を作れないかということで本企画は始まった。企画をする中で、この地区の医療施設や酪農家の方々、中小企業家同友会、そして本大学卒業生の協力が得られることができた。

今回の参加者2年生5名と教員1名の計6名がチー

ムを組み、旅程日程全般は学生独自に計画をし、根室地区における体験研修や卒業生との交流は教員が担当し、4月の段階からスケジュール調整を行いながら活動を行ってきた。本活動は、一部ではあるが旭川大学教育研究活動助成金を受けながらも、費用全般は学生自身の持ち出しによるものである。そのようなことから、学生の積極的で主体的な学びがあったと考えている。以下、本活動内容と学生の学びについて報告する（図1）。

1. 本活動に至るまでの経過

- 4月 学生への呼びかけ 旭川大学教育研究活動助成申請
- 5月 同好会申請（主として学生の安全と保険による担保のため）
- 6月 学生と面談—事前調査（費用や宿泊先等）と計画の促し
- 7月 事前調査と施設への挨拶 学生への最終スケジュール調整
- 8月 2泊3日ルーラル・ナーシング・ツアー、及び振り返り
- 10月 学びの振り返りインタビュー調査（倫理委員会申請の研究）
- 3月 本大学全学教育活動発表会に報告

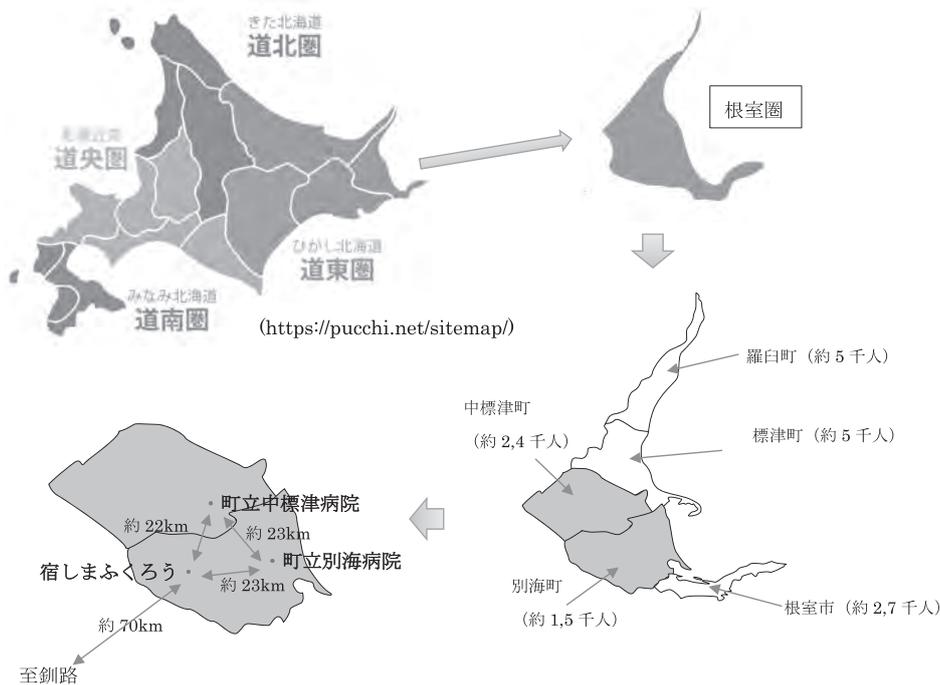


図1 北海道における根室圏域の位置と1市4町の人口

2. 研修のスケジュール

●2018.8.13 (研修1日目)

7:18 JR永山駅出発(4名) → 7:40 旭川発富良野行き → 富良野(マルシェで軽食と観光) → 11:02 富良野発バス新得行(札幌発学生2名と合流) → 12:50 新得発JR釧路行き → 18:01 釧路着 → 19:00 レンタカー(釧路市内にて夕食) → 21:30 別海町(道の宿温泉『しまふくろう』)到着

ほぼ、移動に費やした1日であった。学生たちは費用削減のため、青春18きっぷを提案してきた。現在、富良野→新得間は数年前の台風と洪水の影響でJR路線が不通になっており、代行バス運行となっている(写真1)。この乗り継ぎがうまくいかないと、到着が遅れることを懸念した。また富良野で残りの学生との合流もうまくいき、長時間の旅路とはなったが予定通りに釧路につくことができた。旅程は長くここまで11時間費やした上に、これから約70kmの道のりをレンタカー「デリカD」で移動することになる。すでに日は落ち真っ暗な中、鹿の追突と事故にあわぬようお願いしつつ車をすすめた。大都市札幌・旭川からこれだけ離れていること、同時に近隣の中規模都市である釧路からも2時間近くかかるこの距離を、学生たちは、疲れとともに身をもって体験し感じていた。

宿泊先の『しまふくろう』であるが、地域酪農家の押田さん(オシダファーム経営者)が私たちの意思に共感してくれ、中小企業家同友会を紹介してくれたことから、お声をかけていただいた。この企画に賛同してくれた『しまふくろう』のご好意による受け入れである。予算を絞っている学生向けに、とても格安で宿を提供してくれた。当初、オシダファームで宿泊し、地域の押田さんのお話や酪農体験をする企画を立てていたのだが、当然学生たちの予算とか噛み合わなかった。宿泊費を抑えるために学生たちは、直前までキャンプを企画していた。別海町にある二つのキャンプ場は、研修施設からの距離も程よくあり、加えて天候、食事の確保と風呂の確保などを鑑みても、かなり無理な計画であり学生たちは困惑していた。しかしそこに救いの手があった。地域の人たちの温かさがにじみ出ていたことに、皆感謝の念を感じていた。



写真1 富良野から新得行のバスの中で 2018.8.13

●2018.8.14 (研修2日目)

6:30 起床→8:30 町立中標津病院 (中標津町) 到着→9:00～12:00 研修→中標津で昼食 (フードコート) →14:00 フリータイム (道立ゆめの森・中標津町総合体育館, バーベキュー買い出し) →18:00 町民憩の森公園にてバーベキュー→20:30 道の宿温泉『しまふくろう』到着

町立中標津病院では、事務局長、看護部長佐々木由美子様より病院紹介を受けた後、1時間学生5名は、内科外来、小児科外来、人工透析室、4階東病棟、4階東病棟に分れて、研修を行わせていただいた。各々部署の特徴の説明や看護の実際をみて回った。学生たちはまだ基礎看護学実習Ⅰしか経験がない中で、病院全体の機能などを知らない。今回は実習ということではないので、後に学生たちは看護師の接し方や役割、医療者との協働などの様子が極度な緊張感を持たずゆっくりと見学できたと語っていた。特に病院全体の中で看護師がどのような役割を担っているかが実感をもって体験できていた。その後新人看護師との座談会を設けた。座談会の中では本学卒業生7期生の佐賀さんの姿もあった (写真2)。

病院の研修を終了後、昼食となった。学生たちは安い費用でいかに食事をとるかを考えていた。中標津町は「以外に都会」という学生の言葉通り、充実した食事と買い物の場があった。いろいろ迷った末、フードコートで各々好みのラーメンや丼物で食事をとった。サーティワンのアイスを頬張りうれしそうにしていた。その日の天気はあいにく雨であった。遠出はできず、中標津で大規模無料の「ゆめの森公園」で2時間ほど遊び、新しくできたの総合体育館を見学した。時間に追われながらも夕食のバーベキューに向けての買い出しをした。いかに安くおいしい食材を求めて、各々分担しながら別海町の肉専門店や巨大スーパーに出向いた。効率よく計画的に話し合いながら、手持のわずかな予算を消化していった。



写真2 町立中標津病院にて
(佐々木看護部長と一緒に) 2018.8.14

「憩いの森公園」(別海町)では、4人の先輩が駆けつけてくれた (写真3)。中標津町の保健師1期生は、はじめて会う後輩のために勤務を調整し駆けつけてくれた。町立中標津病院で働く4期生の荒谷さん7期生の佐賀さんは中標津町から、そして根室の道の保健師6期生の濱松さんも勤務を調整し根室からの60kmの道のりを運転して一番乗りで駆けつけてくれた。残念ながら、町立別海病院の5期生はこの度は都合により来られなかった。さて、互いに初対面にも関わらず、話が花が咲いたのはもちろんである。保健師志望の学生は、道の保健師と市町村の保健師の役割に耳を傾け、また看護師として働くことの楽しみや生きがい、そしてその責任について先輩たちから教えてもらっていた。教員が大学で話すよりは何十倍の生きた教育につながったと確信できる。



写真3 先輩たちとの交流
(憩いの森公園でバーベキュー) 2018.8.14

●2018.8.15 (研修3日目)

6:30 起床→8:30 町立別海病院到着 (別海町) →9:00～12:00 研修→各自解散

町立別海病院では病院全体の案内を受けた。最後に竹中看護部長より、道東の医療・看護はもちろん、町の特徴についての説明がとても印象的であった。地域とともにある医療とは、第1次産業である漁業と酪農とともに産業が健康に直結していること、健康を守る我々看護者の責任、その中において看護専門職であるとはどういうことであるかなど。机上では学べないまさに地域に根差した学びとなった。研修の最後には、病院で働く看護師単との交流、その中でサプライズ別海特産のアイスクリームの提供をうけ皆喜んでいた。看護部長から、「どうしたら、この地に来てくれる?」という質問があった。皆困惑していたが、少なからず地域に抱える課題に気づき、自分たちにできることは

何かを考え始めていることが、のちのインタビューでわかった。学生たちは、地方の温かさに触れ、北海道にもこのような場所で看護を頑張っていることを身に染みて感じとっていた。「都会は優れている」というような、知らないがゆえに固定化された概念を打ち破ることができたと感じる(写真4)。

その後は、現地解散となった。理由は安価でスケジュールを組む学生と教員の仕事との関係があった。学生2人は別海町出身の学生の実家に一泊し、もう一人は家族との関係で釧路まで教員が送っていくこととなった。さて学生たちは、ルーラルを十分体験できただろうか。



写真4 町立別海病院にて(竹中看護部長及びスタッフと一緒に) 2018. 8. 15

3. 研修全体を振り返って

本研修は、町立別海病院の共同研究者との協力のもとすすめた体験ツアーであった。学生の学びについては別の機会に発表したい。しかしながら、ルーラルを知らない都会の学生たちにとっては、北海道の広さとともに、ここにも生活する人々があり看護があることを、体験で身をもって知ることができたと考えている。地方・過疎地における医療看護の問題は山積みでありまだ手が付けられていない。そもそもこのような地域があること自体を知らない学生たちに興味と関心を持つことから始めず、どう地方の医療を理解することができようか。地方出身の学生に奨学金で支援して就業期待をかける以前に、もっと広く積極的な関心を注ぐことのできる医療者の育成が必要であると感じる研修になった。学生たちも、「そもそも過疎地を知らないのに、地方の医療を考えることなんてできない」と言っていた。また「地方には温かさがある」とも。これを郷土愛というならば、我々は、このことをテーマに一步進んだ地域医療を真剣に考えていかなくにはいけないと考える。

おわりに

本研修にあたり、たくさんの方々にご協力をいただいた。いの一番に研修に賛同してくださった町立別海病院の竹中看護部長、そして電話一つでこの研修を受け入れてくださった町立中標津病院の佐々木看護部長。メールのやり取りの中で、本研修にとっても賛同してくださり、ぜひ支援したいと名乗り出てくださった元教育者で酪農経営者である押田さん。今回は、オシダファームとの連携こと叶わなかったが、中小企業家同友会にお話をしてくださる中で、学生たちが疲れを癒すことのできる温泉のある『しまふくろう』を紹介してくださった。宿の皆様にも安価で学生の宿泊を確保してくださった。中標津市役所では、企画に関する補助の養成などの紹介もしてくださった。何より研修先の病院のスタッフの方々も優しく丁寧に学生を迎え入れてくださった。すべてに感謝の意が絶えない。地方の温かさを、筆者自身が知る思いの研修企画であった。

この度の研修の多くの費用は、学生自身の持ち出しで始まった研修である。実はこの地域の病院も、札幌方面の大学などからカリキュラム上の研修を受けているという。しかしながら本音を言うと、それらは実りが薄いと感じているという。それは何故なのだろうか。この度の研修は、大学のカリキュラムには関連はない、学生自らの自主性と学ぶ意欲がそれを支えていたと考えている。教員は研修先や卒業生との連絡調整はしたものの、スケジュール管理から費用負担に関わることは、すべて学生の責任のもとで行った。そのことが学生の意欲を駆り立て、非常に意義がある研修となったのではないかと考える。渴望の中でしか本当の学びはない。教育とは、いかに興味関心を引き立てるかというのが、教員の本当の役割であり、それを構築させていくのは学生自身であるということを、思い知らされた。

文 献

- 1) 北海道：釧路・根室圏地域医療再生計画, 2011.
- 2) 松島由実：地域医療で活躍する看護師像を考える－プライマリー・ケアエキスパートナース, 看護展望, 42 (7), 30-43, 2017.
- 3) 松田晋哉：『働き方ビジョン検討会』が示した新たな医療と看護, 看護展望, 42 (7), 14-21, 2017.
- 4) 村上正和, 長谷部佳子, 廣橋容子他：道北地域の中規模に看護学生が就職選択を決定する要因－臨地実習評価との関連から, 24, 24-28, 名寄市病誌, 2016.